

5-1					
主 題		書くことにより、もたらされる認知症利用者の変化と効果			
副 題		日付と名前、バイタル情報を書くだけのお手軽簡単作業			
キーワード 1	認知症ケア	キーワード 2	文字を書く	研究(実践)期間	12 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 泉陽会 光陽苑デイサービスセンター
発表者(職種)	塚田修一(通所課長)、末岡申次(介護主任兼相談員)
共同研究(実践)者	木元美紀(介護職員)、鈴木浩子(介護職員)、阿部しのぶ(理学療法士)

電 話	03-3923-5264	F A X	03-3923-5166
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	社会福祉法人泉陽会が母体である光陽苑デイサービスセンターは、平成 3 年に開設しました。通所介護(定員 35 名)、認知症対応型通所介護(定員 10 名)、現在 110 名ほど在籍しています。また同じ建物内には、特養・ショートステイ、訪問介護、居宅支援事業所も併設しています。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

塗り絵やなぞり字などの脳トレプリントを行っていたが、明確な目的や目標を定めず作業として提供していた。

認知症利用が増える中、認知症に効果のあるプログラムの在り方について模索していた。書くことで認知症の改善、進行予防に効果があるのではないかと考え、日常の活動に導入することにした。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

鉛筆を使って書くことへの反応は良く、拒否する方も少ない。自分の名前を書くことに関しては拒否なく導入しやすいのではと仮説を立てた。鉛筆を持つことで指先の細かい作業も行え、枠の中に文字を書くことで集中力が増す。体を動かす体操が苦手に参加しない方でも名前を書くことは参加できるのではないかと仮説を立てた。また、目的に対する理解力のある方には、名前だけでなく日付やバイタル情報も記入できるのではないかと仮説を立てた。

来苑時に自発的に自分の名前を書くことができるようになることを目的とした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

テーブルに日付と名前とバイタルを書く紙を置いておき、ご利用者が来苑した際に、声掛けをして日付と名前を記入していただく。バイタル測定後、バイタル情報もご自分で記入していただく。すべての記入が終わったら職員が確認し回収する。記入した用紙は、毎日のアルバムノートに貼り付ける。

日付は各テーブルに日めくりのカレンダーを用意し、悩むことのないようにした
ご利用者のレベルに応じて 3 種類の用紙を準備した。

① 日付、名前、バイタルが空欄の用紙

② 名前のみの用紙

③ 名前が薄く印字された、なぞり字のように名前が書ける用紙。

またご利用者の理解力に応じてA～Dのグループに分けた。

A（理解力の高い方：①の用紙を使用していただいた）。

B（理解に時間のかかる方：職員が付き添い①の用紙を使用していただいた）。

C（日付やバイタルなど細かい部分に理解が難しい方：②の用紙を使用していただいた）。

D（鉛筆は持てるが理解が難しい方：③の用紙を使用していただいた）

※ B・C・Dグループの方に関しては、職員がしっかり付き添い対応している。

《4. 取り組みの結果》

Aグループの多くの方は席に着いたら書くというルーティンワークができた。現在では机に名前を書く紙を置いておくだけで、自発的に鉛筆を取り出し名前や日付を書いている。

Bグループの方に関して、記入していることに間違いが多いが、自発的に記入し始めている。近くに座っているAグループの方の行動をみて作業しているように見える。

Cグループの方は、紙を渡すことで説明せず書き始めるようになった。名前がきちんと書けてない日も多いが、作業として理解しているように見える。自発的に作業することはできなかったが、作業として来苑した際に何かをする。という作業に対する認知はできていると思われる。

Dグループの方は、最初は何も書くことができなかったが、根気強く伝え続けることで、鉛筆を走らせることができた。「ここに書くの？」という会話が生まれている。理解しようとしている様子がうかがえる。

《5. 考察、まとめ》

A、Bグループの方は作業としてしっかり認知されており、自発的に行えている。C、Dグループに関しては自発的な作業としては行えていないが、作業としての認知はできている様子がある。

また今回、名前を書いていたことで、隣同士の会話が生まれている。日にちを悩んでいた場合、隣の方同士で教えあっている。その際、記入されている名前を呼んで会話をしている。現在ではAグループの方は他の方の名前を呼んで会話している。名前を呼ばれることで他のB、C、Dグループの方たちも、笑顔で会話する機会が多くなった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

『コグトレ みる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング』宮口 幸治 三輪書店

《8. 提案と発信》

認知症ケアは今後も重要な課題のひとつである。今回の取り組みの中で、利用者の方だけでなく職員自身の変化も感じることもできた良いきっかけとなった。今後も有する能力を引き出すきっかけとなるプログラムを、利用者、職員ともに模索していきたい。